

特集② 北野の谷戸放棄水田の自然環境

まとめ：北野の谷戸の復田

関口 伸一

(トトロのふるさと財団 調査委員会)

近年、休耕田の増加、耕作水田は、農薬の使用、冬季の乾田化、大規模な土地改良などで、「昔ながらの水田」がなくなりつつある。それにより、かつて身近な水田に生息・生育してきた生物が減少している。

北野の谷戸は 2005 年に所沢市の最終処分場の最有力候補地にも挙げられ、これを地域住民の働きによって回避することができた経緯がある。最終処分場を回避したものの、約 40 年前に水田耕作が放棄された場所であり、一部で木本の侵入が見られるなど、植生の遷移が進み陸地化が進行していた。しかし、こうして放棄されたからこそ、頻繁に行われている農薬の使用や大規模な土地改良から免れてきた。よって、放棄された北野の谷戸の水田を「昔ながらの水田」に戻ることによって今となっては絶滅危惧種や希少種となっている動植物を呼び戻せると考えた。

2009 年度は、実験水田を作り、そこに出現する動植物を調査した。北川の調査報告にもあるように、オオアブノメやフラスコモ属などの絶滅危惧種が埋土種子によって出現したと考えた。水田を復元することで、昔ながらの水田植物を復元することができると考え、2009 年 12 月から本格的に水田の復元を行った。2010 年 2 月 20 日には、ニホンアカガエルと思われる卵塊が見つかり、今後も水田動物が出現するものと考えている。

北野の谷戸で目指す水田像とは、「昔ながらの水田生物の保全」である。これは、無農薬、無化学肥料、冬季灌水である。また、絶滅危惧種や希少種となっている水田植物をライバルだと思って、除草しながら保全する。水田に生育している絶滅危惧種などは、昔、保護されて生き残ったのではなく、除草される中で生き残ったものである。水田の除草をせず、立ち入らないようにすると、植生遷移が進行し、すぐに姿は消してしまうものである。これは、水田に生育する絶滅危惧種などは植物の背丈が小さいことからわかる。よって、こうした水田植物は昔ながらの水田植物が存在していたときの営農作業で、稲作を行うことが保全に繋がると考えている。

また、水田を中心とした里地・里山の景観の復元を目指す。これは、新たに水田をつくりだすのではなく、当時の水田の形（水路や畔）を生かして復元することにある。かつて、その場で水田を行われていた時は、考え工夫して水田はつくられたはずである。新たに作りだすよりも、先人の知識を引きついで復元する。また、それによって、かつてその場でみたようななにか懐かしい水田の景観を復元したい。

さらに、「ヒトも来る水田」を目指したい。里地・里山は人と自然の共存であり、水田もそうである。「ヒト」との関わりも大事にし、稲作、収穫を楽しみ水田をヒトとヒトとの繋がりを生み出す場の一つとしたい。